

AR

CA

DI

桃

源

下

歳

47

WINTER 2011

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



岡崎市美術博物館

特別企画展「桃源万歳!」まもなく

第五章 鶏鳴き犬吠える桃源の村

漁師が洞穴の出口で、見知らぬ村を眼下に見つけるまでの話で、ずいぶん長くなつてしまいました。でも、それもやむをえません。陶淵明のこの物語では、村の発見までのこの長いアプローチ、橋がかりの部分が、全テキストの三分の一近くをも占めて、読む者の想像力に強く深く訴え、この物語を単なる理想郷見聞記、あるいは田園牧歌詩をこえた不思議な宿す作品としているからです。漁師が桃源から帰つて後のことと語る後半約三分の一の部分も、同じような不思議増進の効果をもつ、といえるでしょう。

桃の花咲く 隠れ里の物語

館長 芳賀徹

暗い狭い洞窟からにわかに明るい眺望の前に出て、漁師が目をしばたかせながら見晴らしたのは、意外や意外、ひろびろとしていかにも平和で豊かそうな農村の風景でした。「土地は平らかにして曠く」というから、急な山の斜面に棚田を作つて暮しているようなまったくの山村ではないのですね。相当大きな盆地が漁師の眼下にひろがっていたのです。「平ら」で「曠い」と、眼下の光景について一番最初にいうのですから、そのこと自体が漁師にとっては意外であり、驚きであつたことを、私たちは忘れてはならないでしょう。

ところで、「平ら」はわかるにしても、「曠い」と漁師が思ひ、陶淵明が書くとき、一体それはどれくらい広いの広さなのでしょう。山口県の津和野ぐらゐの丸い狭い盆地なのか。福井県の越前大野ぐらゐのひろがりはあるのか。あるいはもつと大きくて、山梨県の甲府盆地ほどもあるのか。——大事なことなのですが、結局はよくわかりません。後代の中国、朝

鮮、日本の画家たちの桃源解釈を調べてみても、みなお国柄、画風によつてそれぞれの広さに描いています。やがて漁師が村のなかに下りてゆくと、村中の人がその報せを聞いて集まつて来たとありますから、せいぜい津和野の盆地ぐらゐと受けとつておくのがよいのでしょう。山形県の米沢盆地ほども広くはないですね。

それからもう一つ、ここで漁師が「土地は平らかにして曠く」と言っているのは、彼がいま村の全景をほぼ一望に収めているから言えることで、このとき彼は洞窟の出鼻の、岩山の中腹に立つていたことを意味します。さきほどから私が「漁師の眼下に」と書いているのは、そのことを強調したいからでした。アメリカ、ワシントンのフリーア美術館で見た石滂の《桃源図》では、まさに漁師が山の中腹の斜面に立ち、下から上がつてきた村の老人と子供が彼を見上げているという構図でした。

漁師にとつての、そして私たちにとつての、もう一つの驚きは、この村の人たちの住む家々が「屋舎儼然」、つまりがっしりとした立派な建物だつたということです。桃源の村里は、ユートピアという石造りの城塞都市ではないのと同様に、神仙たちが霞を喰らつて住む瀛州のような神仙境でもなかつたのです。

点在する立派な農家をめぐつて展開するのは、「良田美池、桑竹の属い」でした。よく耕された田畑がひろがり、その灌漑のためか、満々と水をたたえた池が春の日を浴びて光っている。そしてその豊かな田園風景のあちこちに桑畑があつたり、竹林の群れが風に吹かれてそよいでいたりする。——これはもう、私たちが戦後もなおしばらく、高度成長期の始まるまでは、日本列島のあちこちでまだ経験するこ



伝仇英《桃花源図巻》明代（部分）セントルイス美術館蔵

とのできた稲作とお蚕かいこの農村生活そのままではありませんか。桑畑があるから養蚕がおこなわれているにちがいない。そして竹林さえあれば、漢字で竹かんむりのついたものはない。でも作ることができる。時代は下るが、北宋の大詩人蘇東坡の一文にはつぎのような竹恩礼讃の言葉もあるほどです。

食たべるものは竹筍、庇おほうものは竹の瓦、載おぶものは竹の筏、焚たくものは竹の薪、衣まるものは竹の皮、書かくものは竹の紙、履はくものは竹の鞋、臥ふすものは竹の床、眞まに一日たりともこのもの無かるべからずと謂いうべし。

まさに、しかり。この桃源の村里は、稲作、畑作あり、養蚕あり、そして竹材があつて、完全に独立自営できる東アジアの典型的な農村共同体だったので。ギリシア以来の西洋の理想の田園風景、アルカディアは、青く乾いた空の下にポプラや榆の木や榛はの木が涼しい影を落とす野原の起伏で、牛や羊がそこで草を食はみながらのどかに啼なき、羊飼いの若い男女が小川のほとりに坐まつて蘆の笛を吹きながら恋を語る、という牧畜文化圏の情景でした。それとはまったく異質なのが、稲作文化圏のこの桃源郷だったので。

漁師が驚おどきながら見おろすこの桃源の村には、田畑の間を東西南北に村道が走り、そこを駆けまわつて子供たちが遊んでいます。そして村落の家並みのあたりや木蔭から、漁師の耳に聞こえてくるのは、牛の「モーモー」や羊の「メエ、メエ」ではなくて、「雞犬けいけんの声相聞せいあうもんこゆ」。——あちらで雄鶏が「コケコッコ」と鳴くと、別な方でも「コケコッコ」とやっている。その間に、子供たちとじゃれあっているのか、犬の「ワンワン」が聞こえてくるというのですね。

天下に、ことに東アジアに生きる人々にとって、これほど身にしみ心にしみて平和を体感させる声は他にあるでしょ

うか。鶏は太古の昔から、朝鳴いて人々に夜明けを教えるのが、彼らの聖なる使命でした。だが実際には彼らは昼間にも鳴きます。そして昼下りなどにまさに間ぬけた声で「コケコッコ」と鳴くとき、その声のまわりには一面に、桃の花の色をした平和の微粒子がひろがるのです。

陶淵明はことのほかこの田園の「雞犬の声」が好きだったようで、彼の有名な「園田の居に帰る 其の二」には、自分の莊園の住まいに坐まつっていると村里から聞こえてくる「どこかの露地裏で吠える犬の声」「桑の木のとっぺんで鳴く鶏の声」が対句でよみこまれてもいます。そして実は「雞犬相聞けいけんあうもんこゆ」の句は、どの註釈書にも言うように、陶淵明の愛読書、老子の第八十章「小国寡民」の説にそのまま出てくる言葉でした。だが老子では、それは「隣国相望りんこくあうぼうみ、雞犬の声、相い聞あひあきこえて、民、老死に至るまで相い往来あひわらいせず」と、隣の国がすぐ近くて鶏や犬の声が聞こえてくるほどでも、この理想の小国の民は互いに往き来したりしない、と距離の近さという比喩にすぎませんでした。それをいっぺんに農村平和の象徴にまで転じてしまったのは、東アジア文学における陶淵明の偉大な手柄の一つだったので。

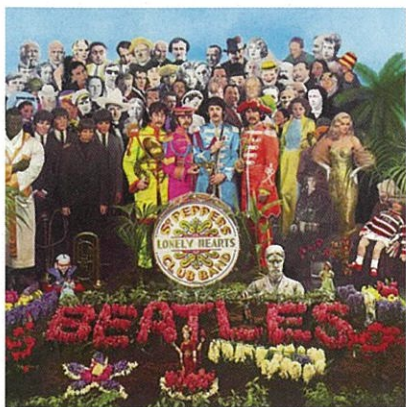
この平和な桃花源の村のなかを、青年壮年の男たち女たちはみなあちらこちらに働きに出て、畑を耕やし、種をまいています。彼らの衣服は、漁師の眼には見なれぬ風変わりなものでした。そして「黄髪わうはつ」つまり白髪の老人たちと「垂髫すいじょう」つまり結び髪を横に垂らした子供たちだけは、まったくなんの気がねもなしに「怡然いぜんとして」、桃の花咲く木蔭で、あるいは野の道を走りまわつて、おしゃべりをし、遊び呆ぼけていたのです。

桃源の村はやはり理想郷だったのでですね。（以下、次号）

ビートルズとその時代

—スウィング・ロンドン50's-60's—

村松和明



『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』のジャケット

『新たに見つかったビートルズの貴重な資料』

一九五〇〜六〇年代のイギリスは、ビートルズがアイドルとなり、モッズ・ルックやミニスカートの若者が、ベスパやミニに乗って街を駆け抜けた時代でした。

「スウィング・ロンドン」と呼ばれたこの華やかな時代は、ベビーブーム以上の世代の方には懐かしく思い出され、今日の若者たちには、その斬新なデザインが新鮮に映ることでしょう。本展では、この輝かしい時代に焦点をあててご紹介することになりました。

展覧会を準備するに当たって、ビートルズをはじめとするロック・バンドの隆盛や、デザイナー、マリー・クワントのミニスカートなどは、いずれも当時の文化を語る上でなくてはならないものです。ファッション関係は、神戸ファッション美術館などからお借りするとしても、ロック・バンドの資料などを持つている美術館などはありません。そこで、東京在住のビートルズ・コレクターのI氏に出品のお願いをすることにしました。

資料は、ビートルズ関係のゴールド・ディスクや、ポール・マッカートニーが使用していたスチール・ギターなど貴重なものがありました。なかでも私が気になったのは、ポール・マッカートニーのサインが入ったインボイス(INVOICE):

EXHIBITION

請求書兼納品書)でした。そこには、以下のような記載がありました。

17 DEC 1966(PAID)

One Sony Dual Standard Portable

9" Television Receiver@69gns.

£72.9-

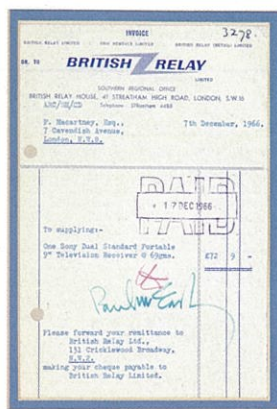
つまり一九六六年十二月十七日に、ポール・マッカートニーが、ソニーの製の九インチポータブルテレビを購入したということが書かれていたのです。

私は、ポータブル・テレビといえば、ビートルズのレコード、『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』(一九六七年)のジャケットの右下に写っていることを思い出しました。この有名なジャケットには、メンバーたちが持ち寄った人物や品々がカラーージュのように集められていますが、それらの意味づけや誰の持ち物なのかは不詳で、現在もなお研究がなされています。いわば謎を秘めたレコードとしても知られているのです。ジャケットの写真は、一九六七年

三月三〇日にチェルシー・マノー・フォトスタジオで撮影されたことから、このテレビの購入は、その三カ月ほど前、つまりポールが購入したばかりのテレビを撮影に持ち込んだと考えられるのです。いままでは、このテレビが日本製であ

ることも分かっています。しかし、ソニー本社に形式などを確かめると、当時の九インチテレビは、このジャケットのものと同型であることが分かりました。つまりこのジャケットの中には、日本に関連するものが二点持ち込まれていたことになるのです。テレビと反対側に置かれた「補助」は、日本公演のおりにジョン・レノンが購入して持ち帰ったものと特定されており来歴もはっきりしています。福助が日本の伝統的なものとしてジャケットに取り入れられたとすると、トランジスタの開発によって小型化されたテレビは、当時日本が世界に先駆けた技術でした。つまりこのジャケットには、日本の伝統と先進性の象徴が左右に対置されていたことが分かったのです。

これらビートルズ関係の資料は、日本初公開となります。この機会に是非ご覧ください。



ポール・マッカートニーのサインが入ったインボイス

会期：平成23年1月29日(土)～3月21日(月)

「桃源郷展」と呼んできた展覧会のタイトルも正式に「桃源万歳！—東アジア理想郷の系譜」に決まり、四月の開催に向けて、少しずつ準備も進んでいるところです。ただ、「桃源郷」と聞いても、具体的な展覧会のイメージが掴みづらいでしょうから、出品作品のことなど、少しご紹介できればと思います。

一言で言えば、非常に多岐にわたる展覧会。まずは、基本となる「桃花源記」の作者、陶淵明の肖像にはじまり、中国・朝鮮および近世日本の桃源図をご紹介。例えば、川を遡り、桃源郷に辿りついた漁師の様子を、俯瞰的に、異時同図として描き出した清の查士標の《桃源図巻》は、柔らかな色調と小さな人物の営みが何とも愛らしい作品です。日本で展示されるのは、一九八二年の東京国立博物館「米國二天美術館所蔵 中国の絵画展」以来、実に三〇年ぶりとなります。また、日本の江戸期の文人画の数々。池大雅にはじまり、蕪村、文晁、幕末の春木南溟なども桃源図を残しています。漁師と洞窟、犬と鶏、漁師を迎える村人の姿など、モチーフや構図は、中国絵画を手本に二種の型として続いていることが窺われますが、桃源郷の入口と出口だけを双幅で描いた蕪村の《武

陵桃源図》などは構図も特異で、ゴリゴリとした、少し不気味とも思われる表現とあわせて、非常に興味を惹かれる作品です。とりわけ出口の絵に関しては、登場人物のうちのどれが漁師で、どのような場面設定となっているのか、議論を呼びそうな謎を秘めています。

桃源図は、近代にも描かれました。明治開国以降、「美術」の制度化に努めた岡倉天心とフェノロサによって、「つくね芋山水」と卑下された文人画の描写は、大正時代になると、西洋由来の表現主義の流行とも相まって、自己の発露として注目され、萬鉄五郎や今村紫紅を中心に、豊かな作品世界へと結実しました。そうしたなかで、桃源の世界が再び息を吹き返し、さらに桃源郷的トポスとして見出された風景が、小川芋銭や小杉放菴らの新南画の中で多数描かれるようになったのです。ただし、単に美術的な要因だけでなく、そこには、急速な都市化・近代化を前に、失われていく田園風景を懐かしむ、ある種の哀愁の念が潜んでいたことも事実です。また同じ頃、武者小路実篤や有島武郎、宮沢賢治らが、公正で自足的な農村共同体を夢見たように、西洋ユートピアに由来する社会主義思想への共感も含まれている

EXHIBITION

たでしょう。ウィリアム・モリスの「ユートピア便り」を「理想郷」として最初に翻訳したのは、社会主義者、堺利彦でしたが、故郷で半農半民生活を送った小川芋銭は、彼らが主宰する『平民新聞』のために、挿絵を手がけたこともありました。ここからは東洋的桃源郷観が、近代日本において、如何に西洋ユートピア、西洋社会主義の感化の中で展開されたかを窺い知ることができます。

紹介したい作品は次々と出てきますが、残された紙面もわずかなため、手短かにご紹介しましょう。

桃源郷は、そもそも物語に詠まれた世界ですから、文学作品も外せません。夏目漱石『草枕』や辻原登の『村の名前』、また漫画家諸星大二郎の『桃源記』など、桃源郷に想を得た作品は数多くあります。また、私たちの置かれた現実を前に、桃源郷的世界は救いをもたらしてくれるのか、そんなリアリティを感じてもらえるようにと、現代の作家たちに、「桃源郷」をそれぞれに解釈した作品を出品してもらう予定です。彼らの作品は、ふたを開けてみるまで、どんな姿を表すか分かりませんが、楽しみは尽きません。

「桃源万歳！」是非、お越しく下さい。

特別企画展

桃源万歳！

—東アジア理想郷の系譜

千葉真智子



小川芋銭《春々運々》1934年 茨城県近代美術館所蔵

会期：平成23年4月9日(土)～5月22日(日)

展示資料借用の交渉で訪れた北

限は秋田でした。「平賀源内展」でのことで、小田野直武、佐竹曙山(八代藩主)などの名品により、源内ゆかりの秋田蘭画のコーナーを計画していた時です。全体数が少なく貴重な秋田蘭画ですが、巡回五会場分、しかも会期中の展示替えを含めると相当の数に及ぶため、借りられるものは皆借りてくるという難題を抱えての気の重い秋田入りでした。

朝六時に岡崎を出て着いたのは午後一時過ぎ。この日の交渉先は近代的な十二階建て複合ビルの一画を占める秋田市立千秋美術館です。応対して下さったのは学芸員の松尾ゆかさん。おっとりしているようで芯は強そう。借用のお願いをする

と、すまなさそうに実は佐竹家の秋田城(久保田城)入城四〇〇年記念の展覧会開催がトップダウンできているので貸し出しは不可との回答でした。やむを得ない事情で、自分も同じ立場だった

ことになったのです。

後は雑談。源内の時代には高松や熊本そして秋田など博物学好きの殿様たちが鳥・魚・虫・植物などの博物図譜を画かせたりしていたのですが、お殿様同士、情報交換や転写をしあう大名間のネットワークがあつたという話です。源内展では企画に香川県歴史博物館も参加し、多くの博物図譜も出品されるため、出品如何に関わらず、企画への協力だけでもと。殿様たちと同様、江戸の博物図譜・蘭画に関わる学芸員のネットワークが作れるのではとか、秋田蘭画と博物図譜との転写関係も少しは明らかになるのではとの余計なお節介話をしていました。

松尾さんから、香川県歴史博物館の秋田での資料調査の話、佐竹入城記念の展覧会変更と秋田蘭画の貸出の許可を伝える電話が入ったのは数ヶ月後でした。



小田野直武《岩に秋海棠と蛙図》秋田市立千秋美術館蔵

COLUMN & TOPIC

八月二日から二〇月三日まで名古屋市を会場に開催された「あいちトリエンナーレ二〇二〇」。記念すべき第二回は「都市の祝祭 Arts and Cities」をテーマに、国内外二三〇組以上のアーティストにより、世界最先端の現代アートが紹介されました。私は現代美術は門外漢ですが、この機会に最新の現代アートに触れてみようかと会場を訪れました。

まず新鮮な驚きであつたのが、「都市とアート」が響きあう、三年に一度の「国際芸術祭」のキャッチコピーとおり、会場が美術館や劇場のみならず、街なかにも展開していることでした。なかでも会場の一つである長者町は、江戸時代には名古屋城下の中心地として賑わい、戦後は日本三大繊維問屋街の一つとして発展し、現在も独特な景観と雰囲気を残す街で、今回二十箇所以上の空き店舗や空地などが展示に活用されていました。元問屋のビルの階段は、すれ違いが難しいほど狭く急で、フロアも狭く、天井や壁も色あせていましたが、部屋二面に多様な素材やモチーフの作品が展開しており、狭い空間に充満する作品のパワーに圧倒されました。またこ

の会場の作品は、愛知県美術館等に展示されていた洗練された感の作品とは異なり、荒々しく実験的な印象で、戦後活況を呈しながら現在に寂れている店舗と、今新たに生まれ出ようとする斬新な現代アートとのコラボが絶妙でした。

次に強く感じたのは、アートとは何かということ。多彩な手法や形態で表された今回の作品は、私のアート＝美という古い概念を払拭するもので、アーティストの主張が形式に囚われず、自由に表現されていました。ただ気になったのは、現代の世相や人間の暗部をえぐるような主題や、自己満足と紙一重の何を表現しているのか分り難い作品も多く、鬱屈した気分が帰途についてきました。アートとは何を目的とし、観る人に何を求めているのか、改めて考えさせられた一日でした。



あいちトリエンナーレ長者町会場の展示風景

諸星大二郎『桃源記』(一九八〇年)

諸星大二郎ほど、神話や歴史の構造、民俗学や文学に通じ、なおそれらを独立した作品に昇華させている漫画家も少ないだろう。現代のパパア・ニューギニアを舞台にしなから、神話の構造を用いて見事に人類誕生の起源に触れた『マッドメン』シリーズなど、本当に感心させられる面白さである。その上、小さく区切ったコマにみっちり描かれた絵が、何とも言えず愛らしい。

その諸星作品のなかに『桃源記』がある。と言っても、陶淵明の『桃花源記』そのままではなく、陶淵明の別の詩「形影神」を組み合わせた、独創的な場面設定が施されている。本来の話と大きく異なるのは、桃源郷を訪れるのが、漁師ではなく陶淵明その人だということ(しかも「形影神」の設定を借り自己の分身二人と問答しながら)。さらに決定的なのは、ほのぼのとした穏やかなはずの桃源郷が、デイスピアの様相を呈していることだろう。そこでは、陶淵明の大好きなお酒は禁止、人々は不老長生のために体操をし、摂生に努め、タブーを犯さうものなら死の谷へと連れ去られてしまう。続きは、読んでからのお楽しみということで、ここ

では触れないが、諸星流のこの桃源記、桃源郷V S ユートピアとして、今春開催予定の「桃源万歳！」

展で私たちが投げかける問題意識と通底するものがあり、とても興味深い。(千)



©諸星大二郎/集英社文庫コミック版

落語「鉄拐」

落語のなかにも桃源郷に関する噺がある。「鉄拐」というその噺は、中国が舞台の古典落語。ある貿易商の記念日に余興の目玉となる芸人を探していた番頭の金兵衛は、迷い込んだ山中で八仙人の一人「鉄拐」に出会う。仙人なら何か術はできるのかと尋ねると、鉄拐は腹をさすりはじめ口から自分の分身を出してみせた。驚いた金兵衛は余興への出演を依頼。鉄拐はその秘術を舞台で披露し一躍人気者になるのだが、仙人である鉄拐が俗世の贅沢をおぼえ俗物化していく、という噺。いったいどこが桃源郷なのかという点、大酒飲みで知られる陶淵明が登場するのだ。

落語立川流家元立川談志は「鉄拐」をこよなく愛する演目の一つとして挙げていて、荒唐無稽な内容で理屈では理解でき

COLUMN & TOPIC

ないこの噺は、立川流一門以外では演じ手の少ない演目のようで、私が聴いたのも談志の弟子立川志らくの高座だった。毒の効いた小気味好い笑いを師匠から受け継いだ志らくの落語は、何かが取り憑いたような熱のあるしゃべりで観客を狂った世界へ引きずりこむ。落語の面白さは、そういった落語家の人間性や人生経験が映り込んだしゃべりと、同じ噺が落語家それぞれへの解釈によって内容の描き方やオチ(サゲ)まで変わってしまう、といったところにあるのだと思う。物語を映像にする話芸の持つ力や、人間のおかしみに泣いたり笑ったりしてしまう心地よい時間は、その場にいた者しか味わえない。「落語とは人間の業の肯定である」と談志は唱えている。どうしようもないがどこか憎めない人々が登場する落語は、聴いていると自分のダメな部分も許せる気がして心が軽くなる。(澤)

さだまさし「桃花源」

さだまさしの歌に「桃花源」と名付けられた一曲がある。一九七七年に発表されたオリジナルセカンドアルバム『風見鶏』に収録され、翌七八年にはシングルカットされた曲である。採譜されたメロディーにさだ

まさしが作詩し、作曲者は後に判ったが、中国人シンガーソングライター劉家昌である。もう三十年以上も昔、当時、高校生活を送っていた自分の耳に、三拍子のゆつたりしたリズムと、平凡な山里の日々を歌ったこの曲は、正直お気に入りとはいかず、曲の良さを感じることはなかったように思う。

歌われているのは、「あなた」の便りを待つ「私」が住む山里の、何の変わりもないのどかな情景である。あらためて今聞き返すと、日本語の歌詞は一枚の絵を描き、メロディーが里を包み込む穏やかな時間の流れを奏でている。癒されるような心地になる優しい曲である。このような山里の風景は、ひと昔前には日本ではよく見られたものではなからうか。追い求める幸せというものは、案外と身近にあるのかもしれない。ふと、そう思わせる曲である。(伊)



INFORMATION

ビートルズとその時代

—スウィング・ロンドン50's-60's—

1月29日(土)～3月21日(月・祝)

■公開ワークショップ

1月29日(土)

「Jimmy SAKURAI 狂熱のギタークリニック

—LED ZEPPELINのギター奏法の秘密—

Jimmy SAKURAI(MR.JIMMY/VONZEPギタリスト)

*午後3時から

■ライブ

2月26日(土) 「スペシャルライブ」

ライブ・ザ・ベアーズ [ビートルズ・コピーバンド]

3月20日(日) 「ヴィンテージギターで聴く50's～70'sサウンド」

三浦央

*いずれも午前11時からと午後2時から

■講演会

3月5日(土) 「ビートルズと日本の文化—福助とテレビの謎」

村松和明(当館学芸員)

*午後2時から

■学芸員による展示説明会

2月5日(土)、3月19日(土)

*いずれも午後2時から

■学芸員による館外講座

2月8日(火)

*午後2時から *会場は岡崎市美術館東館2階講座室となります。

■映画上映

2月19日(土) 「ザ・スウィング60's—ザ・ビートルズ」(2006年/イギリス/76分)

3月12日(土) 「レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ」

(1976年/監督:ピーター・クリフトン/136分)

*いずれも午後2時から

ぴかぴかの世界

ここしばらく、朝は子供向け番組を見ている。

それまでは目覚ましにニュースを観ていたけれど、重く悲しい内容のものが多く鬱々と考えてしまうので、四歳の娘にせがまれたのをきっかけにNHK教育にしてみた。そうしたらこれが意外に面白くてはまったのだ。「0655」シャキーンなどはユニークな発想で溢れているし「にほんごであそぼ」は詩や古典、歌舞伎など多岐に渡って、その道の一流の方に親しみやすくアレンジされているので新鮮だ。アニメはなかなか出てくる画家志望の女の子の家の木には「ダリの柔らかい時計」がかかっていたりと、ちよつとした遊びも隠れている。他にも興味深いアートの作られた短編アニメなどがある。

面白かった！と玄関を出ると景色が何だか豊かでぴかぴかしていて、ふと、娘の世界はこんな感じなのかなと思う。幼い彼女はまだまだ怖い言葉知らない。文化や楽しい想像だけでいっぱいなのは、怖いことが多いはずの現実をプラスに変化させてくれるのではないだろうか。

新しい一年を豊かに過ごすアイテムとして、「子供向け番組」あわせて文化と芸術の宝庫「美術館」はいかが？

(木)

おしゃべり、あれこれ。

美博粧う

このあたりに住む人が「紅葉狩り」と言ったら何処を思い浮かべるだろうか。香風溪かくらがり溪谷か、それとも東公園？美術博物館周辺は、先述の名所・観光地ほどには観光向けの夜間ライトアップなど整備がされていない。だから、紅葉狩り目的では少々物足りないのではあるが、観覧のついでにちよつと散策するのなら、面白い場所は幾つもある。

例えば「風の道」。美術博物館とバス停を繋ぐ、風車のある散策路。ここにはユリノキが並び、その先にはアメリカカフウが続く。アメリカカフウが、真つ先に掌状の小さな葉を鮮やかな真紅に染めれば、ユリノキも負けじと大人の手ほどもある大ぶりの葉を黄色に染める。その様を彫刻「メセイア」前から眺めると、空の青・雲の白・芝の緑と相まって、鮮やかで賑やかな空間が浮かび上がってくる。

建物の南側、恩賜池沿いの二本のカエデも面白い。片方は黄色主体のグラデーション、もう片方は赤主体。同じ色は嫌だわと張り合っているかのようだ。

そんな紅葉も、ここ数日の強風にあおられ、或いは空を舞いあがり、或いは波の様に打ち寄せ、すつかり散って、冬が来た。(野)

編集後記 | いよいよ3ヶ月後に迫った桃源郷展ですが、苦慮しているのが、桃源郷のイメージを伝えること。漠然として、正直ピンとこないという方が多いのではないのでしょうか。そのため、現在、小川芋銭が描き出したような素朴な世界をアニメーションで製作中。この号が出る頃には、当館のロビーで上映できることと思います。桃源郷の話ばかりになりましたが、本年度最後の「スウィング・ロンドン」展も、お洒落なインダストリアル・デザインが多数出品され、目が離せません。ロンドン時代のジェーン・パーキンも出演する「ナック」など、若者文化を象徴する映画をこの機にご覧になってはいかがでしょうか。(千)

表紙図版：小川芋銭《桃花源》1932年(部分)茨城県近代美術館蔵



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第47号 2011年1月発行
編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA